



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	C : シンポジウムⅡ 学びの場の再定義 : 学校と仕事が出会うとき 「学校中退・不登校の若者を仕事と社会につなげるデンマーク生産学校」
Author(s)	大串, 隆吉
Citation	シンポジウム報告書 : 子ども発達臨床研究センター総合研究企画, 2012, 63-71
Issue Date	2013-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52439
Type	conference paper
File Information	RCCCD_Symposium2012_08.pdf



学校中退・不登校の若者を 仕事と社会につなげる デンマーク生産学校

講演者：大串 隆吉
(東京都立大学名誉教授)

デンマークとドイツにおける 若者のための生産学校とは

大串です。あまり皆さんには聞き慣れない言葉の「生産学校」というものについて報告を依頼されましたので、これからお話ししたいと思います。デンマークのことについては、「世界で一番住みやすい」とそこの国民が言っている国だということで、デンマークについて紹介している本も「デンマークの教育は大変素晴らしい」というように書いている本がいくつかあります。鈴木優美さんが『デンマークの光と影』という本の中で、それに対する疑問を書いております。

私も今から報告することはできるだけ客観的にお話ししたいと思っています。デンマーク（の研究）をやる人は少ないです。500万人しか人口はいないので、デンマークをやっても500万人しか有効性がないと思っている若い人もいるみたいで、やっている人はほとんどいませんし、勉強する場所も見つけるのは非常に難しいです。

この生産学校についても紹介されてこなかったのですが、おそらく私が初めて紹介しただろうと思います。そのレジュメのところに、「生産学校は、比較的新しい」とあります。英語では、プロダクションスクールですね。ドイツとデンマークにあります。デンマークは今、88校があり、ドイツが45校。ドイツはこの10年ぐらいの間に2倍ぐらいに増えました。もともと私はドイツで生産学校というのを「発見」して、調べているうちに実はデンマークの影響を受けているということを知りまして、デンマークに行ったわけです。

1980年代以降の現象で、デンマークでは1978年に、教育省が知識と職業教育を結合した第3の教育という新しい形態の教育をつくるということで、生産学校を創設しました。その対象になるのは、知識の教育、要するに学校の教育や職業教育に適応できなかった青年です。入り口は座学ではなくて、販売につながる生産の過程であると。販売につながるといえるのは、要するに、そこで生産したものを売ることができるということ。売のために作る。生産だけの技術を身に付けるというだけじゃなくて、「売のために作る」ということを理念にしています。

これはドイツの生産学校も同じでして、ドイツの生産学校の校長先生が言っていたんですけれども、「職業学校というのは、例えば、塀を作ったときにその塀をもう一度壊して、次の学年の生徒にそれを使わせて塀を作らせるけれども、われわれは違うんだ」と。「作った塀は売るんだ。売れるようなものを作るんだ」と言っていたわけです。

これは1980年代以降にさかんになります。ドイツもそうです。ドイツでは1980年代以降に始まります。先ほど佐藤洋作さんの報告の中でも1980年代半ばに事業を展開し始めたというのがありましたので、もっとこれを調べてみると面白いと思うんですけれども、先進諸国の中で1980年代に何か起こっている。新しい取り組みが何か起こっているという、それが一斉に生まれ始めたという時期なのだと思います。

現在、ヨーロッパ生産学校連盟というのがつくられました。ドイツやデンマークにも生産学校連盟というのがあります。ヨーロッパ生産学校連盟。これはフランスは生産学校という名前は使っていない

ですけれども、フランス、デンマーク、ドイツ、フィンランド、イタリアなどの国々が生産学校を使っていないところも同じ理念を目的にしてヨーロッパの連盟をつくりました。「東南アジアにもある」とデンマークの人が言っており、「つくっているんだ」という言い回しでしたけど、どうもこの教育理念を世界に広げたいと思っている節があります。

生産学校の仕組みと 学んでいる若者たちの特徴

じゃあ、どういうふうな人たちが入ってきているのか。今まで議論されてきたのと同じになりますが、学校に適應できないで中退したり、それから、不登校になったり、引きこもっている若者たちを対象にしております。初めは失業青年を対象にしていたんですけれども、この10年ぐらいの間に方向が変わりまして、不登校なり、学校に適應できなかった若者が対象になりました。

40ページの真ん中のところに1つの典型例、こういう若者が1つの典型だと言って、説明をされるんですけれども。カスパーというのは18歳で、国民学校。国民学校というのは義務学校、義務教育の学校です。国民学校を何度も転校し、いじめに遭っていると。アウトサイダーと自分のことを考えていて、継父のところに住んでおり、母親は父親のことを聞かれるのを嫌がったと。10学年目に職業コースに入って、金属加工訓練コースを選びます。これは日本でいう高等学校ですね。知識を学ぶために静かに座っているのが苦痛で、スーパーで働くようになり、18歳の誕生日に放校された。それで生産学校に入ってきた。

スーパーというのは、ちょっと横道にそれますが、セブン-イレブンというのがあるんです。デンマークはたくさんある。アンデルセンの生まれたオーデンセという町の駅の1階と2階にセブン-イレブンがあります。コペンハーゲンの町にもたくさんあります。地元のスーパーにはないバナナを売っているということで、日本のセブン-イレブンに似ているなと思ったんですけれども、そういうスーパーで働いているんです。

そういう若者たちが生産学校に入って、どのようになっていくか。先ほどちょっと言いましたけれど

も、そういう若者を引き入れて、何を目的にして、どういうことをやっているのかということを、今から話しているだけじゃ分らないと思うので、お見せしながら進めたいと思います。

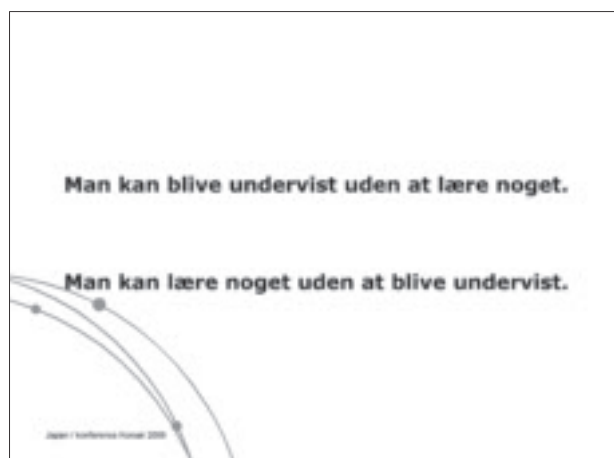
これはデンマークです。日本代表団に対する報告という、佐藤洋作さんたちと一緒にデンマークとドイツの生産学校のツアーをやったときに、デンマークのコーソー（コーショー）というところの生産学校の説明のときに使ってくれたものです。レジュメ41ページの、一番下のところに新しい徒弟制、生産と親密性というのがあります。41ページの一番下です。その1というところがこれの説明です。（スライドの2）

「私たちはそれぞれ何かよいもの、得意なものを持っている。その何かを見つけることは大切である」とグミ・ターザンとオレ・ロン・キルケゴールが言っている。キルケゴールというのはデンマークの有名な哲学者です。そして、「それによって何かを成し遂げる」とコースーア生産学校の我々は言う。グミ・ターザンというのはこれです。こっちがいじめっ子です。それが生産学校に来て力を付ける、と。そうすると、いじめていた大きな子どもたちがちょっと一歩下がるという、そういう意味のことを言っているようです。要するに、「何かを見つけることが大切である」と。「それをどうやって見つけるのか。生産の中でそれが見つかるんだ」ということを主張したいようです。

次が42ページの2のところ。「人は何かを学ぶことなしに教育されることができる。人は教育されることなしに何かを学ぶことができる。」（スライ



スライド2



スライド5

ドの5)

下の段を言いたいわけです。「人は教育されることなしに何かを学ぶことができる。」

それは個人それぞれのカリキュラム、明快で目で見ることができる目的と枠組みをつくって、必要のある生産をやって、何かから離れる。失意や閉じこもりから離れる。離れることができると。社会的で労働的な共同体に入ること、これが生産学校なんです。生産学校の教育の環境は若者の協同の場であるとしています。親密さ、小規模の作業所の一体性、親密さと安心が支配する場だと。責任、減額される可能性のある学校の報酬。同僚、職業訓練指導員と助言者の両方の役割をそれぞれが統一しています。(スライドの6)

今のところは、生産する場合はチームワーク、4人か5人でやるわけです。4人か5人のうちの1人は職業訓練指導員で、1人は先輩です。前からいる先輩。あとの2人ぐらいが新米という、こういうチー



スライド6

ム構成でやります。実際に注文を受けて作ります。例えば、私が訪ねたときに作っていたのは部屋の階段ですね。階段の手すりを作るというのをやっていました。実際にそこで職業訓練指導員や先輩がやっていることをまねしながら、注意を受けながらやるという、そういう徒弟的な形態になります。

生産学校というのは入るタイミングはいつでもいいわけで、個人それぞれのカリキュラムというのは、最高1年です。いつでもいいので、一人一人が入ったときにいろいろ相談しながら、カリキュラム、計画を作っていくというスタイルです。それが実際に注文を受けた中で生産する。そこにあるのは「親密さ」と「責任」です。要するに、作ったものがちゃんと売れないと学校の報酬が減額される。それから遅刻をしたり、時間通り守らなかったりする場合に報酬が減額される。それはまた後で話します。

10の作業所で行われているさまざまな創作活動について

3番目のところは何かをなす人は何かを学ぶ人である。そこで、10ある作業所で何かがなされると。木組みの家の中には水が置かれていなければならない。服はきちんとしていなければならない。こういうふうに書いています。要するに、木組みの家の中には水が置かれていなければならないのは、火事にならないようにということ。服はきちんとしていなくちゃいけない。これは作業服を着るわけですが、きちんと着ていないと機械に巻き込まれてしまう場合があるから、そこで何かするとは、いわば働く場合の一番基礎的なことをここで言っています。基礎的なことをきちんとやるということから始めているのです。ドイツの生産学校では、玄関の入り口に大きな鏡がありまして、「来たときはちゃんとその鏡の前に立て」と。「お前、ちゃんとした服装をしているのか」ということをやる学校があります。(スライドの7)

4番目に飛びますが、今、言った説明は、水を置いていなくちゃいけないとか、そういうのはこのところを書いてあります。10の作業所があります。これは木工ですね。(スライドの8)これはコンピューターです。(スライドの9)これは地域の観光



スライド 7



スライド 8



スライド 9



スライド 10



スライド 11



スライド 12

案内や役場のいろいろな仕組みについての、市民に対する説明というのを、注文を受けて作るというふうになっています。

これは調理です。(スライドの 10) この生産学校の昼食は、調理コースの人たちが作っていて大変おいしいです。それから、あとは市で何かパーティーな

どがあると、そこで注文を受けて届けるということをやっています。これは鉄工で。(スライドの 11) これは事務です。(スライドの 12) 事務というのは生産学校の事務をやっています。ですから、先生の給料とか、収入がいくらあるとか、先ほどふれたように、サボったり、注文にちゃんと応えられなかったもの



スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド 16

を作った人は報酬が減額されます。全部をここで、事務職の訓練を通して彼らや彼女たちが実際にやっているわけです。ですから、彼女たちが報酬や手当を減額する人を呼んで、「あなたは今月はこのぐらい、10回遅刻したから、これだけ手当を減らすよ」と言うそうです。次は、塗装です。(スライドの13)

これは音楽グループです。(スライドの14)音楽と演劇というのがあるんですけど、コーソーは演劇がなくて、音楽になります。これはグループでやる音楽です。私が行ったときは、この子たちは今、1時間半演奏できるけれども3時間続けてやるようにならなくちゃいけない。「市の音楽祭とか、お祭りとかそういうときに請われて、演奏するけれども、1時間半じゃだめで3時間やらなくちゃいけない」ということを言っていました。すごい体力が必要です。

これは造船です。(スライドの15)デンマークは島が多いですから、島と島との間を船で行くわけです。それで造船、船を造るとというのが1つの仕事になる

わけです。彼らは船を造り、生産学校から物品を運んでいくというところまでやっているそうです。私が行ったときは100年前の船を再度、造り直すということをやっていました。これは保育園ですね。(スライドの16)そして、これは洋裁。(スライドの17)洋裁は生産学校の中に作ったものを売る場所があって、そこに地元の人たちが買いに来るわけです。このようなことをやっています。

それで、これをちょっとお見せしたいんですけど。(スライドの21)これは4のところになりますけれども、42ページの壁(作業所の)に生徒ひとりひとりの仕事の技能程度がわかるようになっています。ここの上のところが技能です。例えば、音楽ですとギターを弾くのにこの技術というのは何段階かについて書いてありまして、ここにあるのは名前です。この赤のところはギターの弦を弾くのにあるところをクリアしたと。だけど、まだこの部分が残っているというのが一覧で見られるようになっています。



スライド 17



スライド 21



スライド 22

それは必ず、生徒と一緒に議論して決めてここに書くのだと。

一番右の方は、これはコミュニケーション能力とか、ちゃんと時間を守るかとか、人との付き合いがきちっとしているかということが分かるようになっていきます。これを全部生徒と協議して、生徒が納得した上でここに書くという、そんなスタイルを取っています。ですから、「参加者としてしばしば行われる話し合いというのは、どのように彼らが進んでいるか、何を彼らが学んでいるか、まだ何が欠けているかが明確にされる場である」というのはそういう意味です。

それ以外にここにあるのは生産学校の子どもの能力図かな。(スライドの 22) 丸くなっているところ。一番上がやる気です。次が学校への出席。それから、協同性、作業所への出席。出席というのは、学校に来てても作業所には出てこないケースがあるということになりますね。それから、信頼性とか自己



スライド 23

自身への要求がはっきりしているかとか、自立性があるかとか、創造性があるかという、こういうポイントになっています。

それから、「普通の学校というのは教科ごとにその子の能力を決める」と校長先生が言っていました。「音楽ができるかとか、算数ができるかとか、デンマーク語ができるかで決めるけれども、われわれの学校はそうではなくて、その子は1つの作業をするときに数学的な能力とか感受性とか、いろいろな能力をどうやって総合的な力で発揮しているかというのを見るんだ」と言っていました。「それによって初めてその子のさまざまな側面や人格というのが分かってくるんだろうと」「どうしても学校というのは教科別にその子を評価しがちだ」ということを言っていました。

これはお祭りです。(スライドの 23) 次に 42 ページから 43 ページですね。42 ページの下から 5 行目のところに「生産学校の基礎にある徒弟」とありま

す。それはどういうことかという、「何かをなす人は何かを学ぶ人であり、そこで何かを創り出す人である」と。「重要なことは作業所での生産である。なぜなら、我々はそれぞれ何かいいものを持っているから。重要なことは他にもある。重要なことは何かをそこで創り出すことである。何かを見つけだすところそが大切である。」それが教育の理念だとここでは言われています。

生産学校の現状と課題 時代にもとなう変化とは

39 ページに戻ってください。この生産学校に、どこから来ているかといえば、出身学歴はそこの 39 ページのところに書いてあるように基礎学校が 49.5%。生産学校 24.2%というのは、これは 1 年間で最大の期限なんですけれども、それ以上いる人間ということです。それから、ギムナジウムは 3.1%、職業高校は 3.5%。そういうところから来ています。

44 ページ、45 ページ、46 ページに資料がありまして、まず 46 ページを見てもらいますと、2007 年のデンマークの学校制度と進学率です。普通後期中等教育というのは 45%で、職業後期中等教育というのがここに書いてあるようなものです。職業後期中等教育のところは 44 ページから 46 ページにかけて、デンマークのデュアル制度の図を描いてあります。

デンマークのデュアル制度は日本ではほとんど紹介されていないので、私もあまり詳しく突っ込んでいないんですけれども、例えば、技術系学校のデュアルシステムというのを見てもらいますと、これは日本でいう学年という観念ではありません。4 年の間にそれぞれの職種によって全部学期が違うということと、それから、P という実習が猛烈に多いというのが分かります。45 ページの方に職業系の学校はいわゆる日本でいう職業高校と、VET という職業教育・訓練コースというデュアルシステムと両方あります。美容師なんかの養成のところはそこに書いておきましたけれども、資格試験があって、資格を取るか取らないかというのは決定的な差になるということです。ですから、生産学校は自分がどういう職をやりたいのかということについて、実習を通じての経験の中でつかんでいくということが 1 つの重

要なポイントになるわけです。

先ほどの 40 ページの「ひとつの典型例」というところでは、生産学校ではその子は十分な能力がないと判断して、園芸コースに入れて、生産品をより分ける仕事に従事されたけれども、「することが多いわけではないが、楽しい」。その後、金属加工コースに入ると、「あまりうまくできないが、よい学校だ」と。「これからの希望は女友達を見つけ、仲良くなりたい。見つけるのは難しくないが、付き合い方が難しい。結婚したい。やりたい仕事につき、人生を楽しみたい」と。こういう抽象的なレベルでちょっと困っているという。自分が何に向いているか、何がやりたいのかがまだはっきりしておらず、そういうことで困っているという事例です。

そこを出た後、どこでどうなっていくのかというのが 43 ページです。「修了者の進路」というのがあります。失業、無業というのが 2 割ぐらい。単純に生産学校というのは社会に出るということの中間機関みたいな感じなのですが、学校に戻るとということも 1 つの方向にもなっている。

ですが、41 ページのところの生産学校法第一条に生産学校というのは次のことを意図していると書かれています。「受講者の人格的成長を強めること、そして、教育制度及び労働市場で彼らの可能性を改善すること。すなわち、これは柔軟な雇用関係と公に保護された仕事などの中に彼らの労働を入れることである。さらに受講者の仕事の能力と関心の発展のための事業は、民主的社会において積極的に行動することに貢献する」とあり、さらに「事業は特別の注意を職業青年教育を得ることに導く資格の獲得に向ける」と言っております。

あと 1 点だけ。47 ページを見ていただきますと、「生産学校への補助金の流れ」というのがあります。コムーネというのは自治体、「市町村」です。41 ページのところではコムーネという自治体は基礎補助金以外に居住している生徒に奨学金を支払うことになっていまして、2007 年の平均額は一月 18 歳未満が約 1 万 2,000 円、18 歳以上が約 2 万 8,000 円。生徒の使用する道具類は貸与で、交通費は学割であるとなっています。

手当はドイツの生産学校も同じでして、生徒はこれ以外に自分が注文生産で働いて売ったものからの

報酬を受け取るという、そういう形になっております。(拍手)

質疑応答部分

■質問1 生産学校にはソーシャルワーカー等の役割の職員も配置されているか。

(大串) ドイツとデンマークでは違いまして、かつ、生産学校によって、校長や学校の方針によっても違うのですが、コースの生産学校について言うと、生産学校の職業訓練を指導する人、日本でいうと職業訓練指導員という人と、いわゆる青年教育に関心があって一定の経験を持っている人。資格はいらないそうです。むしろ下手に学校の教師なんか雇うとおかしくなる可能性があるから、青年と一緒に生活してきた経験のある人を配置するのだとか。ですから、2種類なんですね。

ただし、非常勤でカウンセラー、心理療法士に当たる人たちが週に何回か来て、問題のあった子どもたちと面接したり、一緒に作業を経験しながら取り組む、相談に応じるという、そういうスタイルを取っています。

先ほど佐藤洋作さんも言っていたと思いますけど、日本と同じように「生産学校で育った若者が職員になるというケースもあるんだ」と言っていました。ドイツで職業訓練とか職業教育が行われている場合には、社会教育職員というのを配置することになっています。この社会教育職員というのはデンマークでいうカウンセリングをやったり、竹内先生の言われていた生活指導のようなことについて、職業訓練指導員とチームワークを組みながらやっていくという、そういうスタイルを取っております。ですから、ドイツの場合は心理療法士というのではなく、社会教育職員がそれを兼ねており、デンマークでは非常勤で週に何回か来て対応するというふうになっているようです。よろしいでしょうか。

■質問2 国や政府からの補助金について、1カ所当たりどのくらいの補助が出ているのか。

(大串) 金額は分かりません。ただ、減っていることは確かです。先ほど「2015年に95%に中等教育

の修了率をする」と言っているんですけど、生産学校に対する補助金が減り、生産学校数も減っています。減少にともない、日本の学童保育と同じで、生産学校があくのを待っている人が相当数、5,000人ぐらいが3年前に全国でおりました。従って、「95%を達成するのは無理だ」と。もともと生産学校というのは社会民主党政権のときに第3の教育と言ってつくられたのですが、この10年ぐらいは保守党政権になりましたので、お金の出し方や量などが違ってきているみたいです。

■質問3 生産学校を利用する若者たちの中には右翼的な傾向の若者もいるのか。

(大串) デンマークについてはちょっと分かりません。ドイツの場合はそういう若者がいるので、ポーランドへの修学旅行とか、ユダヤ人虐殺の問題についての展示や学習を組み込んでやっています。

それから外国人については、デンマークはこのごろ若いアラブ系の人とか、そういうムスリム系の若者が生産学校で学ぶ例が出てきておりまして、「Politiken」というデンマークのインターネットの新聞ですと、「外国人のいる学校は成績が悪い。PISAの成績が悪い」と書かれています。デンマークでは「外国人のいる学校には子どもを行かせたくない」という傾向が現れているという指摘がありました。外国人の方がいろいろと困難を抱えている。それで生産学校に回ってくるという、そういう外国人の若い人たちが増えてきています。

ドイツも同じように外国人が非常に多いんですけど、生産学校の中にドイツ語のコースを担当するドイツ語教師を配置したり、地域の、日本でいう公民館の中にそういうドイツ語のコースをつくったり、外国人の若者たちのための相談をやる場所をつくったりということで対応しているようです。しかし、生産学校に來ている若者たちの中には、ドイツ人以外にトルコ人と、それから、ロシアから帰ってきたドイツ人、アフリカ系の若者がいて、生産学校では共同してやるけど、外では別々に遊んでいると言っています。なかなか大変みたいです。

(司会) 移民をたくさん受けているというわけじゃ

ないんですね。そういう人も一部はいると。

(大串) デンマークではコーソーの生産学校の場合、7～8年前には、外国人ということは意識していなかったんです。いませんでした。ところが、この2～3年前には外国人の若者がこの生産学校に増えてきました。

(司会) この9月に私もデンマークに行って、3つぐらい見ましたが、移民の子どもがたくさんいるということではなかったです。むしろあんまり見かけなかったです。

〈発表終了〉